2006年8月22～27日

2006 UCIマウンテンバイク世界選手権大会inニュージーランド

2006 UCI Mountain Bike World Championships in New Zealand

優勝候補同士が激しく競り合ったクロカンオリンピック、決着は最終周回の上りで!

日本からも直行便が飛んでいるオークランドから南へ約200km、
温泉とマオリ文化で知られる、ニュージーランド北島の観光地ロトルアで
今年度の世界チャンピオンを決定する世界選手権が開催された。
南半球での開催は実に1996年のオーストラリア・ケアンズ以来10年ぶり。
晴れ渡った真冬の空の下、熱き闘いが繰り広げられた。

PHOTO & REPORT : Koji OHISHI

ビブナンバー01のアブサロンと02のサウザー。昨年のリベンジを果たしたいサウザーが僅かに先行し、最終周回のヒルクライムに突入するのだが……

CROSSCOUNTRY

アブサロン対サウザー、宿命の対決が今年も!

序盤戦は欧州勢4名によって熾烈な戦いが繰り広げられた

クロスカントリー男子エリートは、一周5・9kmのコースを7周回で争われた。優勝候補の筆頭に挙げられたのは、昨年、一昨年と連続して世界チャンピオンを獲得しているフランスのジュリアン・アブサロン。そして最大のライバルと見られていたのが、昨年の世界選手権ではアブサロンに敗れたものの、これまた昨年、一昨年と、ワールドカップのシリーズチャンピオンを勝ち取ったスイスのクリストフ・サウザー。レースは序盤からこの2人と、スエーデンのフレデリック・ケシアコフ、スイスのラルフ・ナフらがリードしていく。

ここロトルアのコースは、周回の前半に長い登り、そして一旦登り切ったら後半はテクニカルな下りとなっており、登りでいかにライバルに差をつけるかがキーポイント。4周目の登りでアブサロンがアタック、サウザーに10秒ほど差をつけるが、下りでサウザーが盛り返す。5周目、6周目も同じ展開となり、3位以下は大きく遅れることになる。

そしてアブサロンとサウザーがほとんど同時にスタート・フィニッシュラインを通過し、ついに最終周回に突入。サウザーが僅かに先行してヒルクライムに突入するが、直後にアブサロンがパス。そして山頂までの登りで35秒の差をつけると、そのまま下りでも差を拡げ、最終的には43秒差で3年連続のタイトルを手中に収めた。2位はサウザー、3位にケシアコフが入り、スエーデンに初めての世界選のメダルをもたらした。また6位には、96年の世界チャンピオンで、XCマラソンのチャンピオンでもあるトーマス・フリシュクネヒトが入り、ベテラン健在ぶりをアピール。7位には03年の世界選を獲りながら、翌04年にEPOの陽性反応で一線を退き、今季復活したフィリップ・メラーグが入った。

男子表彰台。アブサロンはジュニア、U23も含めると、6枚目のアルカンシェル。アテネオリンピックのコールドメダリストでもある

女子エリートは、ノルウェーのガン・リタ・ダールが1周目から独走。最終的に2位に3分近い差をつけ、3年連続の栄冠を手に入れた

女子11位に入った王。中国の連盟もかなり力を入れており、トップ争いに絡んでくる可能性大

4Cross

スタートが光るプロコップが3年ぶりの栄冠

ライバルが戦線離脱する中、プロコップだけが決勝へ!

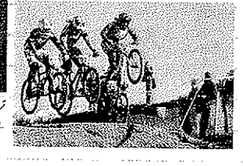
かなりの標高差、ビッグジャンプにウォールと、4Xコースはかなり見応えがあるものになっており、多くのギャラリーを集めて湧かせるものとなっていた。

予選では、すでに今季のワールドカップタイトルを手中に収めているミカル・プロコップがトップタイム。ケガで戦列から離れていたブライアン・ロープスが2番手、エリック・カーターは1コーナーで転倒し、予選不通過となってしまう。

決勝では、スタート勘が冴えまくるプロコップが全てのヒートを1位でファイナルへ。ライバル、ロープスはセミファイナルでスタートを決められず、2番手で入った第2コーナーでインから来た選手と接触し転倒。決勝進出を逃してしまう。

ファイナルでもプロコップは絶妙のスタートを決め、最後まで誰の背中も見ることなく03年以来のレインボージャージを手に入れた。

決勝でもスタートを決め、トップで1コーナーに入るプロコップ。2位ロジャー・リンダーネヒト、3位ディド・チュッグと続く。女子はやはりジル・キントナーが、完璧なレース運びで2年連続のタイトルを手にした



DOWNHILL

驚異的なタイム差で、サム・ヒルが初の栄冠を獲得

一大勢力を誇るオージーの優勝最有力候補サム・ヒル

ここ数年の男子ダウンヒルはオーストラリア勢が台頭し、ワールドカップの表彰台には常に複数のオージーの姿があったのだが、世界選に限っては昨年、一昨年とフランス人のファビアン・バレルが連勝。今年も優勝候補の筆頭だったが、7月に右足の舟状骨を骨折。2ヶ月の静養が必要となり、世界選の出場は不可能になってしまう。

バレルが不出場ということで、優勝の最有力候補となったのが、オーストラリアの若手ナンバー1のサム・ヒル。02、03年とジュニアクラスを制したヒルは、エリートに上がった04年に3位、そして昨年は2位と着実に高順位をマークし、エリートクラスでの初タイトルを狙う。また、03年に世界選を制したグレッグ・ミナーも、今季ワールドでは未勝利ながら調子を上げてきており、怖い存在。さらに来年、母国イギリスでの世界選を最後に引退が噂されるスティーブ・ピートも、ぜひともタイトルを手に入れたい一人。まずは木曜日にシーディングランが行われ、オージー勢の一人、ネイザン・レニーがトップタイムをマーク。ピートが2位、ミナーが3位となり、ヒルは6位から逆転を狙う。

決勝では、シーディングラン20位のクリス・コヴァリックが、それまでの暫定トップタイムを大幅に更新しホットシートに収まると、後続のライダーはなかなかコヴァリックのタイムを上回ることができない。しかしラスト6のヒルが中間タイムでコヴァリックを0・5秒上回ると、ゴールエリアのギャラリーからは大歓声が上がる。そしてヒルは後半でかなりタイムを縮め、暫定トップタイムを7秒も更新。ミナーやピート、レニーはヒルのタイムに届かず、最終的に2位に4秒22の大差でサム・ヒルがエリートクラス初のレインボージャージを手に入れた。

優勝のサム・ヒル。全長2.2kmのコースで2位に4秒差は驚異的なタイム。オーストラリアは隣国ということもあり、ギャラリーからの歓声もひときわ大きかった

2位に入ったミナー。大きなミスもなく、自分としても納得できる走りだったが、今日のヒルの完璧な走りには脱帽という表情だった

左から2位モズリー、1位ジョニエ、3位レイチェル・アサートン。同選手は、昨年のジュニアチャンピオン

左から2位ミナー、1位ヒル、3位レニー。ヒルはジュニア時代から通算3枚目のレインボージャージ

女子はサブリナ・ジョニエが、ライバルのトレーシー・モズリーを破り、初めての栄冠を勝ち取った

真夏から真冬へ。日本代表はこう戦った

全日本選手権の成績上位者を中心に選抜された日本チーム。ここで紹介する9人以外にも、XCジュニアの竹之内悠、4X男子の栗瀬裕太、DH・4X女子の末政実緒が代表となっており、竹之内はトップと同一周回の35位完走を果たした。4Xの栗瀬は予選タイムアタックの第1コーナーで転倒。必死に挽回するが、後一歩のところで決勝トーナメントに進めず。末政はDHの練習中、ジャンプの着地に失敗し激しくクラッシュ。肩の靭帯を痛めてDNS(未出走)と悔しい結果となった。

XCアンダー23

山本幸平

全日本U23チャンプの山本は、レース前の目標順位を20位以内としていたが、見事にトップと同一周回の20位完走を果たした。U23の優勝は、スイスのニーノ・シュルター

XCアンダー23

小野寺　健

さのさかのジャパンシリーズで初優勝した小野寺は、徐々に順位を上げ、32位で完走。レース後は満足気な表情を見せた

DHジュニア

永田隼也

ワールドチームに加入し、世界を転戦した永田隼也。全日本で負った怪我の影響か、決勝は2度の転倒で37位に終わった

DHジュニア

門脇　祥

初めての海外遠征となった、今年度の全日本ジュニアチャンプの門脇。予選38位から決勝は23位とジャンプアップ

XCエリート

片山梨絵

20位前後を走る健闘を見せた片山、後半順位を落とし34位となったが、上位進出への確かな手応えを感じたようだった

XCエリート

白石真吾

発売前のコンボ、新型XTRフル装備のバイクで走った白石は一3LAPの66位。この経験が開発に生きるか?

XCエリート

小笠原崇裕

今年のジャパンシリーズ仙台で優勝し、初のエリートクラス代表となった小笠原だが、ロトルアの寒さに風邪を引いてしまい、体調不良のままで戦うことに。一4LAPの73位

XCエリート

竹谷賢二

全日本チャンプの竹谷は、スタートループで最下位近くまで順位を落とすが、徐々に追い上げる走りで、一2LAPの55位

DHエリート

井手川直樹

今年の目標を「国内制覇」とする井手川は、確実にレースをまとめて39位。自身の順位と走りには満足そうだった